

読書

「奴隷」というショッキングな用語を含む書名に、誰もがたじろぐかもしれない。安土桃山―江戸時代初期、長崎など主に九州の港から、アジア各地や南米へ働き手として売られた人たちがいた。合戦の際に捕獲された領民の一部が、ポルトガル商人らによって売り渡された。イエズス会士フロイスが書き残し、藤木久志氏らの先行研究もあるが、渡航先の扱いを初めて具体的に明らかにした。

「マカオ、フィリピンなどアジア諸国に加えてメキシコ、チリなどでも日本人奴隷の存在が確認できたのは大きな驚き。あまり知りたくなかった歴史が、知られたくない歴史かもしれないが、南蛮貿易の全体像解明に必要な研究ではないか」

夫で東京外国語大特任准教授、ルシオ・デ・ソウザさん(39)とメキシコなどの公文書館に何度も赴き、史料を調査してきた。専門は日欧交渉史、キリシタン史。京都大人間・環境学研究科ではフロイス研究などで知られたヨリッセン教授に師事した。

「関西には南蛮屏風(びょうぶ)本を語る

「大航海時代の日本人奴隷」の

岡 美穂子さん



「奴隷」という言葉は刺激的だが、いわゆるブラック企業など現在の働き方と比較できる部分もあるのでは」と語る岡美穂子さん(京都府京都市中京区)撮影・船越正宏

おか・みほこ 1974年生まれ。東京大史料編纂所准教授。ポルトガル生まれのソウザ特任准教授と、2005年頃から戦国時代の海外渡航者を調査・研究。著書に「商人と宣教師」。

南蛮貿易で売買の歴史

などゆかりの品が残り、京都は国際交流研究に絶好の場所だった」と振り返る。

キリスト教、鉄砲が伝わるなどアジアとヨーロッパの交流が急速に深まった時代。アフリカ系外国人が織田信長の従者に引き立てられるなど、日本列島も地球規模での流動化の一拠点となっていた。

基礎史料は、異端審問の記録だ。「奴隷は財産。ユタヤ教から改宗したポルトガル商人らの財産目録に詳述がある。来日ポルトガル商人に接した当時の人々が、日本人も奴隷として売買対象になると気付いたのだろう」と背景を語る。

本書は日本で年季奉公として身売りされた後、メキシコで期限のない終身奴隷にされた男性が解放を求めた陳述や、国内では長崎で日本人キリスト教徒が在日ユタヤ教徒に石をぶついたりした事例も紹介。豊臣秀吉が、海外への日本人売買に強い懸念を示していた事実ともリンクさせていく。

「最下級の扱いを受け、人種差別があったにもかかわらず、運命に甘んじることなく、地球のどこでもたくましく生きた人たちの存在を知ってほしい」。悲惨な事例の中にも、希望を見いだす。

(「大航海時代の日本人奴隷」は中公叢書・1512円)